Epiphanies
その瞬間

No.13

ひらめきが未知の扉を開く

水圏天然物化学研究室
松永 茂樹 教授
Shigeki Matsunaga

私の専門は未開拓の海洋生物を素材として医薬品の探索を行うことです。この分野に私を導いてくださった恩師が2人います。

1人は水産化学の鴻巣章二先生。海洋生物から薬を見つける研究を始めようとされていた鴻巣先生は、最初の講義で宿題を出されました。「サイエンス」誌に掲載された「Drugs from the sea」と題した総説の全訳をせよというものです。その論文を訳すうちに、自分はこの分野に進みたいと真剣に考え始めました。当時、大学3年。水産学科（現在の水圏生物科学専修）に進んだものの、幅広い分野の中から進路の選択に迷っていました。

同じ頃、私の興味を喚起したのが有機化学の権威である森謙治先生の講義でした。非常に刺激的な授業で、研究意欲をそそられました。水産学科の中で有機化学に関連する研究室は鴻巣先生のところだけ。もはや選択の余地はありませんでした。

水産化学研究室対東京水産大学の親善ソフトボールの一場面。
手前は打順をお待ちの鴻巣先生
（1980.10.農学部グラウンドにて）

ところで、私が水産学科に進んだのは「ひらめき」によります。理科Ⅱ類だったため希望は理学部や薬学部、さらに英語の教師にもなりたかったので教養学部も選択肢の一つでした。しかし、希望の書類を提出する直前、ある情景が頭に蘇りました。修学旅行で行った日光の水産試験場で見た、大きなニジマスが群れをなして水槽の中を泳いでいる姿です。その瞬間、「自分が進むべき道はこれだ!」と直感しました。今にして思えば、自分の一生を左右する選択がこのひらめきによってなされたわけです。

ひらめきは研究の突破口になることもあります。海綿からペプチド毒を発見したのですが、その作用機序の解明が一向に進みません。そんなときに、ふと頭に浮かんだのが先の森先生の言葉でした。

「図書館で科学誌を読んでいると、自分の抱えた問題が解けることがよくあった。」

たまたま手元にあったサイエンス誌を開くと、ペプチドの立体配座に関する論文が目につきました。その論文をヒントにして、そのペプチドの生理作用の謎が一気に解けたのです。

ひらめきは何もないところから突然わいてくるものではありません。自分が吸収してきた知識や経験があるからこそ、何かがトリガーとなって起こる現象だと私は思っています。